



北海道バスケットボール協会

指導者育成専門委員会

2010/1/22(金)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 66

ミニバスにおける技術向上の課題

北海道ミニバスケットボール連盟
会長 倉島章夫

1 ミニバスと強化

ミニバスケットボールには、「強化」という表現は、馴染みません。どのスポーツも同様でしょうが、目的は、あくまでもバスケットボールを通しての「児童の健全育成」にあり、バスケットボール界においては普及発展に主眼をおいています。ですから、私たちは、まず「バスケットボールが大好き」の児童を育てたいと考えています。

また、普及発展は、初期段階では強化と一致しますが、ある所から相反するようになってくると考えられます。私たちミニバス連盟では、少数のエリート選手を育てるのではなく、全体のレベルアップを図ることを第一としています。ですから、U-12のように、優秀選手を集めて強化するというには賛成できず、指導者養成と資質向上を図る立場を取っています。このように、「選手個人の強化」ではなく「指導者の資質向上による選手の技術向上」を考えています。

先に行われた「第35回北海道ミニバスケットボール大会兼全国大会道予選会(2010/01/07~10)」では、予選リーグから延長戦・三つ巴でゴールアベレージによる判定、トーナメントも白熱した試合の連続となり、どこが勝ち上がるか予測が立たない大変盛り上がった大会となりました。従来は、札幌地区を中心に数地区が勝ち上がる傾向が顕著でしたが、近年、札幌地区以外が着実にレベルアップしているのを感じていました。そのような流れの中で、今大会の女子では6地区がベスト8に残ったという大混戦で、より全体的なレベルアップの加速を確認できました。

2 指導者の資質向上

それでは、なぜレベルアップが進んできたかを考えたいと思います。主な理由として以下の2点を挙げたいと思います。

1) 指導者講習会・ミニバス教室の実施

極当たり前のことですが、講習会等が確実に力となっています。ミニ連関係の講習会・教室は、大部分が指導者と児童がともに参加する形式が多いのが特徴です。各地区協会主催の講習会等を除き、道ミニ連が関与しているのは、アシックスミニバス教室(隔年)・道強化委員会と共催の指導者講習会・道ミニ連主催指導者講習会・三菱電機ミニバス教室等があり、これらの成果が、徐々に現れてきたものと思います。

なお、三菱電機ミニバス教室は、次の項で触れる夏季交歓大会の会場で、三菱電機のコーチングスタッフならびに数名の選手が、男女各 100 名の児童を指導するもので、時間的には 4 時間程度です。J B L ・ W J B L の選手とともに過ごす時間は、大変な刺激を受け、各地区少年団員の意欲を大いにかき立てるものとなっています。

一方、指導者が単なる技術指導者であってはなりません。児童の健全育成に携わるる以上、指導者の人間性も求められます。講習会などでは、残念ながら、この部分に触れられないことがあるようです。

2) 夏季交歓大会の完全ローテーション化と開催地の「+4 枠」

夏季交歓大会は札幌地区を除き、苫小牧→函館→旭川→北見→帯広→釧路と、各地区でのローテーション開催が確立しています。確立の最大要因は、開催地の出場チーム数「+4 枠」でしょう。通常よりも多くのチームが参加できることが、開催地のレベルアップに大きく貢献しました。また、全道大会を開催することにより各地区連盟の組織力が高まり、このことも間接的に開催地区チームのレベルアップにつながっています。

3 レベルアップへの課題

北海道全体としては、確実にレベルアップされてきていますが、実際問題としては、まだまだ課題山積です。

1) 長身選手の減少

今大会と 5 年前とを比較してみると、下表の通り長身者の減少が明らかです。

	男 子		女 子	
	165 c m 超	内 170 c m 超	160 c m 超	内 165 c m 超
30 回大会 (2005 年)	19 名	5 名	29 名	3 名
35 回大会 (2010 年)	6 名	2 名	17 名	3 名

原因は不明ですが、今大会だけではなく、近年、このような傾向が続いています。前述したように、全体としての技術力はアップしているものの、北海道のバスケットボールの将来を考えるならば、長身者の減少というのは寂しい現実です。男子だけの減少であれば、野球やサッカーに流れた影響も考えられますが、女子も同傾向ということで、対応に悩みます。

2) 女子の課題

男子は、全国レベルで比較しても上位に位置付けられます。「札幌青葉」・「札幌本郷」・「江別」・「千歳向陽台」・「札幌二条」と全国大会でも優秀な成績を収めています。しかし、女子は、中位と考えられます。女子の好成績というと、「北見北光」を除くと「札幌ふじふさ」・「旭川愛宕」とかなり以前のことになります。

それでは、なぜ、このような差が生じたのかを、私見ですが、考えてみたいと思います。男子の場合、技術の差は感じられません。それに対し、女子の場合は、差を感じます。特に、「片手のプレー」にあります。

全国の上位チームに比較すると、ワンハンドのジャンプシュートのできる子の率が明らかに低く思います。永らく、女子は、(特に小学生は)ワンハンドシュートはできないものだと観念的に思い込んでいた指導者が多かったように思われます。最近では、指導者の自覚も高まり、徐々にできる子が増えてきています。

次に感じるのは、片手で引き寄せるリバウンドです。そして、遠投力です。確かに、男子よりも筋力は劣りますが、可能な子は結構いますし、シュートでも近距離から、筋力の増加に合わせて、徐々に距離を伸ばせばよいのではないのでしょうか。その子の将来を考えるならば、無理をしない範囲で取り組むべきだと思います。

3) 審判の眼を持つことの必要性

これも全く当たり前のことですが、とても大切なことと思います。ミニバスは基礎の段階ですから、ゲーム中に審判に反則を取られないから良いのではなく、日常の練習の中で、「何が良いプレーで、何が良くないプレーなのか」をしっかりと指導できる指導者でなければなりません。

ディフェンスを抜こうとした際の突き出しのトラベリング・ディフェンスに接近した際のダブルドリブル・前に出て止めようとせず、横から手や体を接触するディフェンスなど、もっともっとしっかりと指導してもらいたいチームが、全道大会でさえ、目につくときがあります。

指導者には、技術講習会には参加するけれども、規則（伝達）講習会にはあまり積極的ではない傾向を感じることがあります。審判資格取得のためではなく、規則を正しく理解し、指導するために講習会を利用することが必要ではないのでしょうか。

4) 指導者不足

少子化による団員の確保も大問題ですが、実は、指導者の確保も、大きな問題を抱えています。かつての若い指導者も年数が経ち、それぞれの職場でも重要なポストに就くようになってきました。勤務上、思うように指導の時間を確保できない人が増えてきています。それに反し、若い人による補充が十分にはなされていません。

北海道のミニバス指導者は、約8割が教員で2割が一般の方となっています。教員は5～6年で転勤があり、それが原因のチーム解散・消滅も耳にします。地域に住む一般の方が中心となり、教員がアシストとなるようなケースになることが望ましいと思いますが、現実には、かなり少数です。

今後、地域スポーツクラブとの関係なども視野に入れた対応も必要になってくるのではないのでしょうか。

4 団員減少と4校枠問題

少子化によるチーム維持の困難が、全国的に問題となっています。かつて愛知県の岡崎（13校）・昭和（11校）少年団が多数校で1チームを構成し、全国大会で何年も連続優勝していました。より多くの子にバスケットボールを楽しんでもらうという趣旨から、下記（概略）のような登録規定（4校枠ルール）ができました。

- ① 単独校
- ② ①で対応できない場合近接校
- ③ ②で対応できない場合同一中学校区
- ④ ③で対応できない場合近隣4校以内
- ⑤ 強化のためでない5校以上の場合日本ミニ連の承認を得る

そこで、今大会と5年前の大会の参加チームの実態を比較すると以下のようになります。

30回大会（2005年）

	男子	女子	計
単独校	11	11	22
2校	7	8	15
3校	3	2	5
4校	3	3	6

35回大会（2010年）

	男子	女子	計
単独校	7	8	15
2校	4	8	12
3校	8	4	12
4校	5	4	9

明らかに、単独校・2校が減少し、3校・4校が増えています。それだけ団員募集が難しくなっているのです。

そこで、最近、4校枠撤廃を主張する人々が出てきました。しかし、撤廃するとどうなるかははっきりしています。かつての岡崎や昭和のようなチームが続出するでしょう。優秀な指導者のいる強いチームに児童が集中し、弱いチームは連盟登録さえしなくなることが予想されます。単純に「強いチームができるのだから良いのではないか」ということにはなりません。ここでも、強化と普及の相容れない部分があります。

私たちが努力していますが、日本協会・北海道協会にも率先してマスコミに働きかけ、世間の注目度をあげていただきたいと願っています。しかし、日本のバスケットが国際的に強くならなければ、容易に取り上げてもらえないというのも事実です。

5 規則問題

これも私見であり、以前にも述べさせていただきましたので、ここでは簡単に触れておきますが、現行ミニルールは、一般ルールに比べ、デフェンスにきつい内容になっています。サイドが2680 cm・エンドは1500 cmと一般のコートに近い広さですから、バックパスがなかったり、アウト・オブ・バウンズがリセットでは、デフェンスのメリットがかなり失われてしまいます。

私は、デフェンス力の向上がオフェンス力の向上につながると考えていますが、いかがお考えでしょうか。ただ、私にしても安易に一般ルールと同じにする考えはありません。あくまでも、ミニの精神を生かしたものでなければなりません。

それでも、北海道のローカルルールというのは、連盟内でもなかなか理解していただかず、少数意見となっています。

そんな中で、旭川地区ミニ連では、数年前から一時期の落ち込みからの脱却を図り、競技力の向上につながるルールの検討に取り組み、前述のルールではありませんが、一部を改正して実施しています。その効果の確認には、もう少し時間を要するかと思いますが、大きな関心と期待を持っています。いつか、旭川地区ミニ連の経過や実績（効果）の発表を期待しています。

6 その他の問題

団員確保に悩んでいる中で、着衣・シューズ・練習試合を含む遠征費などの負担が大きく、子どもを少年団に加入させたいが入れられないという父母の声も聞こえてきて、全国的にも問題となっています。全体から見ると、おそらく一部のチームということになるのですが、このような理由で、やりたい子を断念させているのは、残念です。

7 終りに

執筆依頼を受けてから日数的に少々厳しいこともあって、推敲も不十分の状態でも提出することになってしまい、趣旨にそぐわない内容になったとしたら、大変申し訳なく思います。

最後になりましたが、日ごろ道ミニバス連盟の活動ならびに大会へ暖かいまなざしとご期待を賜わりありがとうございます。本稿ならびに北海道ミニバスについてお気づきのことがございましたらご意見、ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。